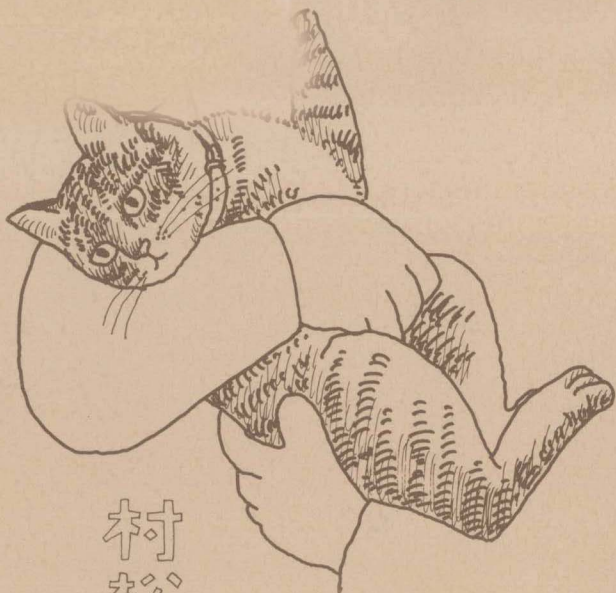


帰ってきたアブサン



村松友視

帰ってきたアブサン



村松友視

村松友視（むらまつ　ともみ）

一九四〇年、東京に生まれる。

慶応大学文学部哲学科卒業。

出版社勤務を経て、文筆活動に入る。一九八二年、『時代の女房』で第八七回直木賞受賞。著書として『私、プロレスの味方です』『上海ラバイ』『夢の始末書』『作家装い』『小説カミさんの悪口』『烏丸ものがたり』『桃のシャバン』『ワインの涙』『百合子さんは何色——武田百合子への旅』『ダンサー』『流水まで』『アブサン物語』など多数。



帰ってきたアブサン

一九九六年七月一日 初版印刷
一九九六年七月二五日 初版発行

著　者　村松友視

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話　三四〇四―一二〇―（営業）
三四〇四―八六一―（編集）

振替口座〇〇―〇〇―七―一〇八〇二

印刷　三松堂印刷株式会社

製本　小高製本工業株式会社

© 1996 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-309-01087-3

帰ってきたアブサン ↑ 目次

帰ってきたアブサン

5

カーテン・コール

71

墓

111

妻が大根を煮るとき

117

夏なつ
猫ねこ

135

壺

169

あとがき

194

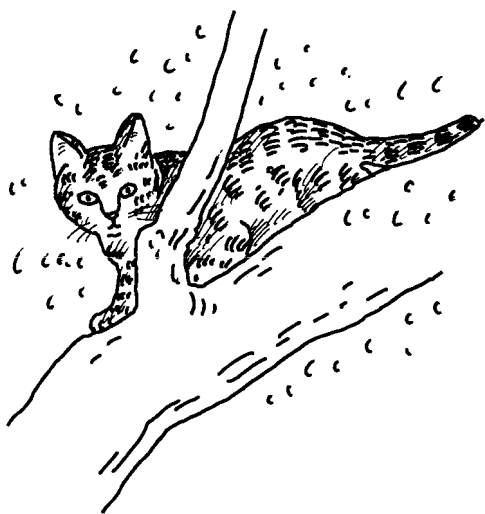


装丁・装画・挿絵

和田誠

帰ってきたアブサン

帰ってきたアブサン



あれから一年以上も経っているのに、いまだにアブサンの死に対する実感が湧かない。それは、あながちよくある死んだ猫への追慕の念の昂まりゆえというのでもなさそうだ。妻は、アブサンの墓の見える廊下を線香を供える場所と決め、日に何度かそこに坐って、深い思い入れに浸っているような顔をしている。私がそれにつき合っていたのはほんのわずかな日々で、ここところは廊下に線香があることさえ気にとめずに通り過ぎていた。それは、私がついこのあいだ二度ばかりアブサンに会っているせいかもしれない。しかし、こんなことを妻に伝えたところで、笑い飛ばされるくらいが関の山だから、この件については黙っていることにしている。

この世にいないはずのアブサンが私の前にあらわれたのは、習慣としてやっている速歩

のコースの途中のことだった。正確に言えば、私が早足で歩いている前方にあらわれた猫が、あわてて垣根の中へ潜り込み、通り過ぎるのをじっと待っているような感じだったが、何を思ったか急に垣根の中から這い出て来た。首輪をしていないところを見れば野良猫……私はそれくらいの気の向け方で、その猫に近づいて行つた。警戒心が強いはずの野良猫が、私がすぐ前まで歩いて行つても逃げようとしな。不思議だなと首をひねつたあと、アブサン……私は喉の奥から声を絞り出してしまった。

私にきよんとした目を向けているのは、大型だが痩せた三毛猫で、アブサンとは似ても似つかない容貌だった。だが、その似ても似つかない猫を見た瞬間、私は目の前にアブサンがあらわれたと信じ込んでしまったのだ。私に対する警戒心をいっさい表わさず、^{まき}垣根に頬をこすりつけながら、気持よさそうな顔をつくっているのを、私は茫然とながめていた。

しゃがみ込んで手をさしのべると、猫は素早いうごきで^{まき}垣根の中へ姿を隠し、それきり姿を見せなくなった。遊んでいるつもりなんだな……そう思つてアブサンの名を呼んでみたが、^{まき}垣根の中からはすっかり猫の気配が消えていた。

「アブサン……」

語尾を先細らせた私は、ぶるつと軀からだをふるわせて速歩をつづけた。猫に死なれたあとの

典型的な幻想ってやつか……自分を喰わう声が軀の底に湧いた。アブサンが死んだあと三日くらい目を泣き腫らしていた妻にくらべて、どちらかといえば私は冷静だった。悲しみに浸っている暇のない忙しさのせいでもあり、先に酔っ払われてしまつて介抱役に回つたような気分のためでもあつた。それに、猫が死んだくらいで、子供を失つたわけじゃあるまいしといった世間的な目が、アブサンに向かうのを防ごうという構えもあつた。

猫を子供代りといった感じで飼っている人は多いし、長いこと一緒に暮していると自然に家族としての対し方になってくるものだ。それはそれで文句はないのだが、そういう気持ちに対する世間の反発も無視できない。たかが猫一匹が死んで何がどうしたんだという鉾先が、この世を去つたアブサンにまで向かうのは防がなければならない。とくに私は物書きであり、アブサンを実名で登場させた小説もいくつか書いている。へえ、作家に飼われると有名な猫になつちゃうんだ……ペット派からだつてそんな声が向けられ、その矢が私や妻を貫いたあげくアブサンにまで及ぶことだつてあり得るのだ。

(まず、アブサンの死についての感情を、世間に向けて大袈裟に表わさないことくらいか……)

アブサンの死の翌日、私の家に届けられたいくつかの花束に目をやった何人かの訪問者の反応から、私はするように思い決めた。

宅配便の配達人が、廊下の花と線香の煙を訝しんで、あれは何ですかと妻に聞き、へえ、猫ちゃんがねえといった面持で帰って行く。アブサンのための花を配達した人の中にさえ、同じ表情があった。彼らの目には、廊下に立ちこめた線香の煙や、そこに供えられた花などが奇異に映ったにちがいない。へえ、猫ちゃんがねえ……というセリフが、私たち夫婦を通り越してアブサンにまで及ぶのは何としても防がねばならぬ。妻に表情をあんばいしろというのは無理として、私だけでも平静を装わなければという気持が、アブサンの死後すぐに私の中で固まった。

その私が、速歩の途中で出会った猫を、すぐさまアブサンそのものと決めてしまっているのだから、それこそ滑稽というものであるのかもしれない。感情を抑え込んでいたために、不意に出会った猫に向かって本音が出てしまったのだろうか。いずれにしても、私は速歩の途中で出会った三毛猫を、アブサンそのものと信じ込んでしまったのだった。

槇の垣根の中へ隠れ込んだ三毛猫を気にしながら、私はとりあえず速歩のコースを辿った。槇の垣根の先にあるファースト・フードの店に沿って左へ曲り、郵便局や文房具店や

蒲団屋を左に見て進み、信号を右に渡って、野球のグラウンドとテニス・コートのある公園を一周して引き返す……私は、槇の垣根のところへもどって来るまで、さつき出会った三毛猫のきよとんとした目を思い浮かべていた。だが、帰り路で三毛猫と出会うことはなかった。槇の垣根の猫が隠れ込んだあたりや、道の反対側へ目を配ったが、三毛猫は二度と姿をあらわさなかったのだ。

（カミさんにも黙ってしよう……）

私は、ほくそ笑む気分で家路を辿った。猫が人の目に触れぬ場所で死ぬ習性について、妻とあれこれ語り合った記憶が、おぼろげによみがえった。あれは、アブサンが死んで半年ほど経った頃のことだった。

「猫って、死ぬときに人間に姿を見せないっていうでしょ」

「ああ、人目に触れないところへ行行って死ぬらしいね」

「袖萩そではぎもそうだったでしょ」

「駄目なオジサンもそうだったな……」

そのとき妻と私は、我が家の外猫そとねこについての思い出を喋り合っていた。猫のことでありながら、直接にアブサンのことを話すのでないことが、私たちがその話題を選んだ理由か

もしれなかつた。袖萩と駄目なオジサンは、妻と私が外猫に勝手につけた名前だった。

袖萩は、寒い雪の日に子連れで庭に面した軒下に姿をあらわした、我が家の外猫の第一号だった。子供を心配しながら軒下にうずくまる老いた牝猫が、「奥州安達原」の袖萩を思ひ起させた。

前九年の役のあと、安倍貞任あべのさだとう、宗任兄弟むねとうが再挙を計ろうとする筋に、奥州に伝わる「善知鳥と」や安達原の鬼女の伝説をおりませて、近松半二と竹本三郎兵衛などが合作でつくり上げた時代物が、「奥州安達原」という台本だ。現在において上演されるときは、この「奥州安達原」の二段目の切である「環宮明御殿たまきのみやあきみでんの場」のみというケースが多く、安達原の三段目というので俗に「安達三あださん」と呼ばれている。

源義家の舅しゅうとである倭仗直方けんじょうなおかたの娘袖萩が、貞任との恋ゆえに勘当され、貞任が戦いに敗れたのち流浪して盲目となり、娘のお君に手を引かれ袖乞いをしながら、環宮明御殿へ父母をたずねてやって来る。一徹な父倭仗直方は娘に会おうとせず、袖萩は祭文さいもんに托して詫びを言う。この祭文を語る愁嘆場が見どころといわれ、私は市川猿之助の袖萩を何度か見たことがあった。袖萩と貞任の二役をひとりの役者が演じることが多いが、猿之助もこの二役を受け持っていた。祭文語りの愁嘆場で、おびただしい紙の雪が降りしきって、その紙

の雪が袖萩の口に入り顔に貼りつくありさまは、いかにも猿之助らしい迫力ある舞台だった。

袖萩を連想するといえば、いかにも儂はかなくいじらしい感じだが、この老いた牝猫と袖萩の共通点は、雪の日にあらわれたということ以外にはなかった。袖萩は気丈な牝猫で、餌の取り合いの際などは、相手が我が子であろうが容赦なく争い奪い取った。年端もいかぬ仔猫が餌に近づこうとするのを、袖萩がいきなり殴りつけた場面を見たことがあったが、猫にも殴るというやり方があるんだなとおどろいたものだった。

その袖萩の子が子を産み、その猫がまた子をといたぐあいに数が増え、我が家にやって来る外猫はすべて袖萩一族といってよかった。次から次へと子が増えていっても、袖萩の威厳は変らなかった。どんなに軀が大きくなった子供も孫も、袖萩の前では怖気づき軀をちぢめていた。

袖萩がやって来たのは、アブサンがまだ四歳くらいの頃だった。外猫は絶対に家の中へ入ることがなく、アブサンは家の中にしかない猫だったから、袖萩一族とアブサンが接触することはほとんどなかった。ただ、アブサンが生涯に三度ほど外へ脱出したケースがあり、一度だけ袖萩とアブサンが庭の木の上で対峙している場面を見たことがあった。

庭の木の枝に巨大な猫がいるのを見て、私は「ああ、アブサンが庭にいる……」とぼんやり感じ、次にそれが有り得ない光景だと気づいた。あわててガラス戸を開けて外へ出ると、アブサンの上方に袖萩がいて、じりじりと後退りあしづきしている。巨大なアブサンは屈託ない表情で木を登って行くのだが、袖萩の方は追いつめられてもはやあとがなく、しきりに息を吹いて威嚇するものの、アブサンはその意味をまるで解さない。私は、そっと木に近づいて袖萩を刺激せぬよう注意しながら、木からアブサンを引き剥がして家の中へ連れ帰った。アブサンと他の猫を同じ場面ならべて見たのは、そのときが最初にして最後だったが、アブサンがいかに軀の大きい猫であるかをあらためて知った。当時、アブサンは育ち盛りの頃で、おそらく七キロ強はあったのではなからうか。

だが、アブサンは家の中で時を過ごすため、伸びた爪を切り揃えられて暮している。もし、切羽つまった袖萩が、窮鼠ならぬ窮猫となって猫を噛む意気ごみを見せたなら、ケガをしたのはアブサンの方だったにちがいない。何しろ、この界限の外猫を制圧した百戦練磨の袖萩とアブサンとでは、いざ実戦となったときの年季がちがおうというものだ。

その袖萩も、最期だけは哀れだった。ある夏の午後、原稿を書いていた私の目のふちに、時どき微妙にうごくものが映り、私は筆を止めて何気なく隣の空地を見やった。空地の中

奥に材木が積んであり、周囲には夏草が生い繁っていた。微妙なうごきを見せているのは、どうやら生き物のようだった。私が、本棚に置いてあった望遠鏡をのぞいて見ると、それは袖萩の姿だった。病を得た果てなのか、あるいは寄る年波の衰えからか、もはや袖萩は息をするのもままならぬといった感じである。息を吸い込み、それを吐くときに首ががく、がくとゆれうごく。微妙なうごきと見たのは、袖萩の息も絶えだえの姿だったのだ。

私は、冷蔵庫から牛乳瓶を取り出して皿に注ぎ入れ、それを手にして塀を乗り越え空地へ降りた。袖萩は、私に気づいて逃れようとしたが、すでにその力はなかった。枯れた板に押しつけていた顔をかすかに持ち上げ、袖萩はじっと私の方を見た。板に押しつけていた左頬の毛が顔に張りついていて、袖萩の面相が変っていた。老猫とは思っていたが、顔つきが断末魔の様相を呈していて、その衰えが際立っていた。かつて見た東映の忠臣蔵映画に出ていた薄田研二の吉良上野介の貌をかさねて、私は横たわる袖萩をながめていた。

牛乳の入った皿を顔の近くへ置いたが、袖萩は何の反応もしなかった。私は、袖萩にこれ以上恐怖を与えてはならぬと、後退するようにその場を離れた。そして、夕方になって同じ場所へ行ってみると、袖萩の姿はすでにそこになかった。あの体力で軀をうごかすこ